

博士論文（要約）

女性バイセクシュアルの現状と心理支援
ーライフストーリーと語り合いをもとにー

金 智慧

第1部 問題と目的

近年、性的マイノリティに対する社会の注目や関心が高まりつつある。国外においては、2001年のオランダを始め、2022年現在、31か国と地域で同性婚の法制化が行われ、日本においても2015年に東京都渋谷区と世田谷区で「同性パートナーシップ宣誓制度」が可決されるなど、国内外において性的マイノリティをめぐる社会の変化が見られるようになった。この変化に伴い、性的マイノリティ当事者を対象にした研究や心理支援の重要性が認められるようになった。しかし、性的マイノリティ当事者を対象にした研究や心理支援の多くは、レズビアンやゲイを対象にしており、同性愛者と同様に性指向のマイノリティであるバイセクシュアルを対象にした研究や心理支援は不十分であることが指摘されている (Jorm et al., 2002)。バイセクシュアルは両性に対して恋愛感情を抱き、異性愛者と同様愛者の両方から「二重の差別 (doubled discrimination)」を受ける可能性があるとしており (Dodge et al., 2016)、同性愛者とは異なる体験や精神健康の問題を持つことが推測される。特に、男性バイセクシュアルと比較して女性バイセクシュアル当事者の心理的問題ないし身体的被害の深刻さが指摘されている (Fredericksen-Goldsen et al., 2010)。

そこで本研究は、女性バイセクシュアルを取り巻く社会の現状を把握したうえで、当事者らはいかにして自分のセクシュアリティと向き合い、生きているのか、その中でどのような心理的問題に直面し得るのか、について明らかにすることを目的とする。また、当事者同士での語り合いがもたらす心理的变化を検討することで、当事者を対象にした心理支援につながる知見を得ることを目的とする。

第1章では、先行研究を概観し、本研究が目指すべき課題について明らかにする。第2章では、本研究の目的と研究全体の構成を示す。第3章では、本研究が用いる方法論的枠組みに関する説明と、本研究の対象となる女性バイセクシュアルの定義や捉え方、研究対象の1人としての研究者の体験の捉え方について記述する。

第2部 社会における女性バイセクシュアル

研究1：女性バイセクシュアルに対するイメージ態度調査

4章では、女性バイセクシュアルに対する人々の見方・捉え方を明らかにするために、女性バイセクシュアルに対するイメージ・態度について量的・質的な検討を行った。和田 (1996; 2008) の同性愛者に対する態度尺度をもとに、女性バイセクシュアルに対するイメージ・態度 (ATFB) を測定する尺度を作成し、調査を実施した。また、ATFBと性的マイノリティの知り合いの有無、性役割指向、LGBTに関する知識との関係性について検討した。さらに、自由記述の質的な分析を通して女性バイセクシュアルの具体的なイメージや態度について検討を行った。

その結果、異性愛者男性は特に女性バイセクシュアルに対して否定的なイメージ・態度を持つことが示された。一方、LGBTに関する知識を持ち、平等主義的な性役割指向を持

つ異性愛者は、女性バイセクシュアルに対する肯定的なイメージ・態度を持っていることが明らかになった。また、バイセクシュアルの知り合いの有無が、異性愛者の女性バイセクシュアルに対する関係の拒否度に影響していた。同性愛者の場合、異性愛者と比較して女性バイセクシュアルに対する関係の拒否度は低かったものの、両性愛傾向を持つことから「自分たちと一緒にではない」という感覚があり、心理的距離を置いている可能性が示唆された。また、女性バイセクシュアルは、同性愛者と異性愛者の両方から両性愛傾向に対する否定的なイメージを持たれており、どちらの社会においても自分のセクシュアリティが話せない状況に直面している可能性が示唆された。

第3部 女性バイセクシュアルの自分に気づく

研究2：女性バイセクシュアル当事者の自覚・自認体験——2名の女性バイセクシュアルの対照的な語りから

第5章では、女性バイセクシュアル当事者である研究者自身と、もう1人の女性バイセクシュアル当事者の自覚・自認に関する語りを比較しながら、女性バイセクシュアルが自分のセクシュアリティに気づき、受け入れていく過程と、その中で直面し得る心理的葛藤について検討を行った。

その結果、2つ自覚・自認パターンが見出され、2つのパターンにおいて、初めて恋愛感情を抱いた対象の性別から決まる「自覚前のセクシュアリティ」と、生物学的な性を受け入れたうえでの「自己の性イメージ」の違いが見られた。限られた2事例において明確な違いとして表れており、「自覚前のセクシュアリティ」と「自己の性イメージ」の2つを基準に自覚・自認体験を分類することは、多様に存在し得る女性バイセクシュアル当事者の体験を検討するうえで有効であることが考えられた。

研究3：女性バイセクシュアル当事者の自覚・自認プロセスモデルの構築——8名の女性バイセクシュアル当事者の語りから

第6章では、第5章での研究結果を踏まえ、8名の当事者のインタビュー調査を通して、女性バイセクシュアルの自覚・自認プロセスモデルの構築を試みた。

その結果、3つの自覚・自認プロセスが見出された。自覚・自認プロセス①では、異性愛者女性として生きてきたが、同性愛傾向に気づき混乱するも、自分の中の異性愛傾向に再度気づくことで、女性バイセクシュアルの自分を受け入れる過程が見られた。自覚・自認プロセス②では、両性に開かれた性イメージを持ち、同性が好きになったことからレズビアンとして生きていたが、自分の異性愛傾向に気づくことで、女性バイセクシュアルである自分を受け入れる過程が見られた。自覚・自認プロセス③では、同性愛傾向は大人になれば治ると深く考えず、その後の自分の異性愛傾向に気づき安心するも、消えない自分の同性愛傾向に直面し悩む中で、身近な他者からのカミングアウトをきっかけに女性バイセクシュアルである自分を受け入れる過程が見られた。

3つの自覚・自認プロセスから、2回以上の自覚と自認を体験する共通点が明らかになり、同性愛者とは異なる女性バイセクシュアルの自覚・自認プロセスの特徴として位置づけられた。一方、インタビュー調査の後半において「あいまい、わからない」、または「レズビアンか、バイセクシュアルか」と自分のセクシュアリティの不確かさに関する共通した語りが見られ、自認した後の当事者たちの体験に何らかの共通点があることが明らかになった。

第4部 女性バイセクシュアルを生きる——語り、語り合う体験

研究4：女性バイセクシュアルを生きる体験—自認後の人間関係の変化に着目して

第7章では、4名の当事者と研究者自身である〈私〉との語り合いを通して、人間関係の変化に注目しつつ、異性愛主義社会と性的マイノリティ社会でバイセクシュアルを生きる体験について検討を行った。

異性愛者主義社会と性的マイノリティ社会の両方において、女性バイセクシュアルの自分を「受け入れてもらえる場・人間関係の獲得」が、女性バイセクシュアルを生きる体験における大きなテーマであることが示唆された。そして、当事者たちにとってカミングアウトは、異性愛主義社会と性的マイノリティ社会の両方において行われるものであり、カミングアウトを受ける側の反応は、その後の関係性の変化や「受け入れてもらえる場・人間関係の獲得」の可否につながっていた。また、同じ女性バイセクシュアルと交流できる場や機会が少なく、自分のセクシュアリティを受け入れてもらい、肯定される体験を得にくい状況は、当事者たちの自分のセクシュアリティに対する不確かさにつながっている可能性が示唆された。

研究5：今この場で、女性バイセクシュアルの“私たち”が語り合う体験

第8章では、女性バイセクシュアル当事者2名と〈私〉との語り合いをもとに、当事者同士で自分のセクシュアリティや体験を語り合うことが持つ意味と、語り合いがもたらし得る心理的な変化について検討を行った。

当事者にとって〈私〉との語り合いは、「受け入れてもらえる場・人間関係の欠如」による孤独感から離れ、“女性バイセクシュアル当事者同士の私たち”を通して、“女性バイセクシュアルの自分”を新たに探求することを促していることが考えられた。また、〈私〉との語り合いにおいて、安心して自分を語り、体験の共有・共感、ありのままでいられる感覚が得られたことが、当事者の「受け入れてもらえる場・人間関係の獲得」体験につながっている可能性が考えられた。当事者同士の関係性や交流は、当事者の女性バイセクシュアルを生きる中での心理的葛藤の解消につながっていることが予想され、当事者を対象にした心理支援において活かされる可能性が示唆された。一方、当事者性を持つ研究者または支援者の立場は、対象となる当事者よりも権力を持つ側になることから、研究または支援において自分の当事者性に対する内省を心がけつつ、当事者同士という関係性だからこそ見えてこない、伝わらない部分に敏感になることの重要性が示唆された。

第5部 総括

第9章では、これまで行ったすべての研究を総合的に考察したうえで、本研究の臨床心理学的意義、性的マイノリティ研究における意義、そして本論文の限界と今後の課題について論述した。

本研究の意義は、第1に、女性バイセクシュアルが生きる社会というマクロな視点から、女性バイセクシュアル個人というミクロな視点までを視野に入れて検討していることが挙げられる。第2に、女性バイセクシュアルの自覚・自認プロセスを提示し、自覚・自認体験における心理的葛藤を明らかにした点が挙げられる。第3に、当事者を対象にした支援の1つとしてピアサポートの可能性を見出したことである。また、「当事者同士」という関係性ゆえの難しさや限界を吟味することで、今後の実践に向けて考慮すべきことを提示できたことに意義があろう。

今後の課題としては、バイセクシュアルに対するイメージ・態度の尺度作成、自覚・自認プロセスの一般化可能性の検討、実践活動への応用可能性の検討などが挙げられた。